

聖恋学園シリーズ

一夜だけの恋人
〜前編〜



著・パルフェ
絵・ゆーちん

早めのクリスマス

雪がちらつく十二月の日曜日。日も暮れ夜になろうとする頃には、街中にあるラブホテルは既に満室となっていた。

そのラブホテルの一室。とある若いカップルが二人きりのひと時を過ごしていた。聖恋学園の学生『空木ふみか』と『風間勇樹』である。

二人は一年生。入学してから特に接点がなかったが、学園祭の実行委員に携わったことで、ぶつかり合いながらもお互い惹かれ合い、学園祭当日に結ばれ恋人同士になったのだ。

そして今日は交際を始めてからちょうど一ヶ月の記念日。二人は少し早いクリスマスデートを行っていた。なぜ少し早いクリスマスなのかというと、強豪で知られる聖恋学園のサッカー部員として復帰した勇樹が、十二月下旬に行われる合宿と試合の為に、クリスマス当日は二人で過ごせないのである。

なのでお互いデートできる日曜日に、こうして早めのクリスマスパーティーを過ごしているわけだ。

二人は自分達の住んでいる町から少し離れた街の駅前で待ち合わせをし、ショッピングモー

ルでデートとランチ。そして映画を見終わった後、スイーツ店でケーキに舌鼓をうった後、路地裏にあるラブホテルへと入ったのである。

入ったホテルは運よく部屋が空いていたが、学生である勇樹達にとつてラブホテルに入るのは初体験。少し緊張しながらもフロントの部屋ボタンを押し、いよいよ二人きりの空間へと入っていく。

「わあ〜！ 素敵な部屋！」

ふみかには部屋に入るなり、そう言いながらフカフカのベッドへと飛び込んだ。

「私、ラブホテルに入るの初めて。勇樹君は？」

「俺だつて初めてだよ。だつて女の子と付き合うのも、ふみかが初めてだし」

勇樹はそう言うのと荷物を置き、ベッドに仰向けで横たわるふみかへと覆いかぶさつた。

「キヤツ！」

「ふみかっ！ 好きだつ！」

勇樹はそのままふみかを抱きしめると、まるで理性を失った獣の様にふみかと口づけを交した。ふみかは少し不意をつかれた様に驚いたが、勇樹を優しく受け止め笑みを浮かべた。

「もおっ…勇樹君つたら」

「い…ごめん…俺、我慢できなくて、つい…」

勇樹はハツと我に返り、強く抱きしめていた手を緩める。すると今度はふみかが勇樹の身体を抱きしめてきた。

「ふみか…？」

「嬉しい…私もずっと我慢できなかったんだから。私も勇樹君と、こうして二人きりになりたかったから」

そう言いふみかは勇樹に顔を近づけ口づけをした。こうしてお互いの身体を触れ合うのは学園祭の後夜祭で結ばれて以来である。

勇樹はこの一ヶ月の我慢が解放されたかのように、ベッドの上でふみかにまたがったまま、ズボンと下着を脱ぎ捨て下半身を露出した。

「キヤツ！」

勇樹の股間のモノは、興奮で大きく反り返っていた。ふみかも彼のたくましい陰茎を前に目を輝かせる。

「勇樹君のオ○ンチン…スゴイ…」

「ふみか…もう我慢できない。早くふみかの身体が欲しい」

「あん！ ちょっと待って」

興奮気味にふみかの服を脱がそうとした勇樹を、彼女は微笑みながら優しくそれを制止した。

「慌てすぎだよ。するのは…シャワー浴びてから。ねっ」

「あっ…ごめんごめん！」

「ねえ、勇樹君」

「ん？」

「よかつたら、一緒に入る」

「えっ!? い…いいの!？」

「もちろん」

一緒にシャワーを浴びようと誘うふみかの言葉に、勇樹は興奮気味に答えた。そして二人そろってシャワールームへと消えて行く。

学園祭以来、二人の熱い夜が再び始まろうとしていた。

